

特選
2016

金融広報中央
委員会会長賞

第49回「おかねの作文」コンクール

祖父のランドセル

神奈川県・カリタス女子中学校 1年 酒谷 南帆

私は悩んでいる。寄付するか、作り直して手元にとっておくか……。

幼稚園年長の頃、父の仕事の都合でオランダに住んでいたため、休みを利用して日本に一時帰国し、日本の夏を楽しんでいた。日本には曾祖母と祖父母が待っている。祖父は長年腎臓病をわずらい、お腹もぷっくりして歩くのもしんどそうになっていた。そんな祖父がランドセルを買ってくれるというので、私は嬉しくてたまらなかった。私が選んだのは、濃いピンク色のランドセル。少しお姉さんになった気分で、「早くこのランドセルを背負って小学校に行きたい！そしたら、写真を撮って、じいじに送ってあげるね!!」と、約束した。しかし、それは叶わなかった。新しい年を迎えてすぐ、祖父は私のランドセル姿を見ることなくこの世を去ってしまったのだ。私にとって今までで一番辛く、悲しい出来事だった。この日から、私にとってランドセルは、祖父からの最後のプレゼントであり、形見となった。

小学4年生の夏、日本への帰国が決まり5年弱のオランダ生活が終わった。転校先では、学校指定の黒いランドセルを買わなくてはならず、私はランドセルを二つ持つことになってしまった。もう、祖父のランドセルを背負って学校に行くことはなかった。祖父のランドセルを使わぬまま時は過ぎ、6年生も終わりに近づいた頃、母と「卒業したらランドセルはどうする？」と話すようになった。どちらも大切に使ったのできれいだし、処分してしまうのはもったいない。寄付をするか、ミニランドセルに作り直してとっておくか……。しかし、作り直すには、結構なお金と時間がかかることが分かった。結局、私は決断を下せないまま中学生になり、今に至っている。

私の手元にある二つのランドセル。正直、後から買ってもらった黒いランドセルには、特に何の思い出もなく、使ってくれる人がいるのであれば寄付しようとするのが決めることができた。しかし、祖父のランドセルには思い出も思

い入れもたくさん詰まっている。寄付してしまうと、私の手元には何も残らない。でも、使わない……。祖父が最後に私の為に使ってくれたお金と思い出の両方を捨ててしまうようで辛く、私をずっと悩ませている。

もう一人、いつも私に会えるのを楽しみにしている人がいる。93才の曾祖母だ。曾祖母はいつも私に会う度に、「今度来る時には、もうおらんから、何か良いもの買って帰りゃあ。」とお小遣いをくれる。しかし母は、私が本当に必要な時にもらったお金を使えるようにと、今まで私がもらった全てのお金を貯金してくれている。だから、私もそうすることが当たり前になった。お小遣いも、もらっていない。勉強に必要なもの等両親が私に必要だと思えば購入してくれるからだ。どうしても欲しいものは、まず自分で本当に必要かを考えてから両親に伝える。当然、自分で必要でないから我慢しようと思うこともある。友達と出掛ける時は、何にどれくらいの金額が必要かをあらかじめ考えてからもらっているので不便はない。お金は必要と思えば使うことができるが、思い出が加わると難しい。たとえお金がものにならなくなっても同じだ。

祖父のランドセルには、私の為に使われたお金とたくさんの思いが詰まっている。だから悩む。しかし、使わずにとっておいてもう3年が経ってしまった。思い出として作り直してとっておくにしても余分にお金がかかってしまうし、もはや祖父からもらったものではない気がしてしまう。どうしたら祖父が一番喜んでくれるだろうか？どうするのが一番良い使い方ができるだろうか？もう一度母と考えてみた。そうしたら、祖父は腎臓病だったから旅行が大好きだったけれど長旅ができなかったこと、病院に通いながら定年まで一生懸命働いたこと、図書館や公民館の館長の時には、イベントの時に手品をして、子供達を喜ばせていたこと等を聞き、とにかく人と交わることが大好きだったことが分かった。だったら、祖父の代わりにランドセルには旅をしてもらい、次の人に使って喜んでもらった方がいいかもしれない。手放してしまっても祖父との思い出は、私の胸の中にしっかり残っている……。

お金の使い方には色々あり、使われた先でどう活かされるかも色々ある。私は、今だけでなく、先のこともしっかり考えた使い方をしていきたい。これは、祖父のランドセルのお陰でそう思うようになったのかもしれない。お金の重み＝気持ちの重み＝思い出の詰まったランドセル。もう少し悩んで、自分で祖父の

ランドセルの行き先を決めたいと思う。

